

2-O-5

療養通所介護事業所における多職種連携の実際 多職種連携のレベルから見えるもの

鵜飼知鶴
畑吉節未

【研究目的】療養通所介護事業所で勤務する看護師がとらえた多職種連携の実際を明らかにし、質の高いケアの提供に質することを目的とする。

【研究方法】〔研究対象〕A 県下の療養通所介護事業所で勤務する看護師。〔分析方法〕対象者の同意のもと面接内容を録音記録し、逐語録を作成の上、島崎（2008）による「地域連携・地域包括ケアのレベル」の4段階をもとに内容分析しその傾向を検討した。〔倫理的配慮〕本研究は神戸常盤大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】療養通所介護における看護師の多職種連携の特徴が3点明らかになった。

1) 療養通所介護の看護師の多職種連携のレベルは、1~4まで存在したが、3・4レベルが多かった。2) 連携を取っていた職種は、訪問看護師、医師等の医療職、介護士、ケアマネージャー等の福祉職、その他多くの職種であった。3) 連携の内容は、〈情報の交換〉〈情報の共有〉〈ケアの継続〉〈意思を尊重したケアの実施〉〈ケアの提案〉〈ケアに関する指導〉〈統括〉等であった。

【考察】在宅では、療養者と家族が望む自分らしい生活を安全安楽に過ごすことができるように支援するために多職種と連携することが不可欠である。特に医療依存度の高い療養通所介護事業所の療養者においては看護師が多職種間の連携を図っていることが明らかになった。

2-O-6

ライフプランニング構築のためのウェルネス教育の展開 - 健康スポーツ科学からの発展 -

柳 敏晴
近藤みづき

健康的で正しい健康観を持てるようにする大学におけるウェルネス教育は、大きな役割を持つと考えられる。本研究は、ウェルネスチェックテストを用い、ウェルネス教育を通し、学生達が、運動を楽しむ、楽しく正しく食べる、自分の身体に関心を持つ、生活を楽しむ、他者との関係を見直す、世界の一員であることを認識し、ウェルネスライフスタイルの構築の一助になるか、どの項目が影響力を与えるのか等を明らかにしようとした。

そこで本研究では、田中と水村が一覧にしたウェルネスチェックテストを用い、健康スポーツ科学の授業開始時と終了時にアンケート調査を実施した。授業形態は、実技、演習、講義である。各授業では、4月時と7月時で回答度数割合は変わらないが、授業別に検討すると、「運動を楽しむ」「世界の一員である」の回答度数割合が授業により異なることが認められた。今回の調査では、授業形態を問わず、幅広いウェルネスの考え方の情報を伝え、学生自身の身近なことからウェルネスを考え実施させることが、ウェルネス教育による健康的なライフプランニング構築になることが明らかになった。ウェルネス教育は、「気づき」から「学び」、そしてそれを「行動変容」に結びつける過程であるともいえる。

大学教育におけるウェルネス教育の意義を考えると、どのような授業形態であっても、健康的なライフプランニング構築に大きな役割を持つことが示唆された。